

TOPICS 今号のトピックス

- 戦後70年企画第1弾 沖縄戦をテーマに番組上映会&公開セミナーを開催
- 戦後70年企画第2弾は、戦争全般と広島・長崎の被爆をテーマに開催
- 広島平和記念資料館にサテライト・ライブラリーを設置ほか
- 企画展「手塚・石ノ森ヒーローズ」&夏休み子供向け体験教室を開催ほか

■戦後70年企画第1弾 沖縄戦をテーマに番組上映会&公開セミナーを開催

■沖縄戦慰霊の6月、番組上映会とひめゆり学徒隊などのパネル展示で、多角的に実施

放送番組センターでは本年、戦後70年の節目に当たることから、6・7月に沖縄戦、8月に戦争全般や広島・長崎の被爆をテーマに、番組上映会と公開セミナーを実施した。



り学徒隊の悲劇を伝えた写真やパネルを展示した。(左写真)

上映番組は、Aプログラム『沖縄戦とその後』は、琉球放送『草の根は叫び続ける～中村文子1フィートの反戦』、日本テレビ『NNNDキュメント10 沖縄・43年目のクラス会 変わらぬ怒りと苛立ち』、NHK『シリーズ太平洋戦争と日本人(4) 未来世を生きる～沖縄戦とチビチリガマ』、フジテレビ/G・カンパニー『終戦45年ドラマスペシャル 白旗の少女』。Bプログラム『セミナー登壇者関連番組』は、名古屋テレビ/琉球朝日放送『メ～テレドキュメント ちむぐりさ～戦後60年 戦争の記憶』、沖縄テレビ『むかしむかし この島で』、TBSテレビ『報道ドラマ 生きる～戦場に残した伝言』(※)の合計7番組。※印以外は公開番組。

18日間にわたった上映会には、延べ1千人が来場、タイムリーな企画に参加者からは、「素晴らしい上映会ありがとうございました。知らなかったことを知ることができ、多くの人に見てもらいたいと思った」など、また展示会には、「パネル展示は悲惨だった。目を背けたくなくなったが、見なくてはならないと思った」などの感想が寄せられた。

■沖縄からの制作者も交え、セミナーを実施

公開セミナー『テレビが伝えた 沖縄戦の傷痕』は、7月4日、放送番組センターと同じビル内の日本新聞博物館シアターを会場に、午前中は登壇者の制作番組3本を全編上映、午後の討論では、番組のねらいや戦争を伝えることの難しさなど、2時間にわたって活発なトークが展開された。

登壇者は、琉球朝日放送と名古屋テレビに所属した、土江真樹子さん、沖縄テレビを経て、現在は沖縄テレビ開発常務取締役の山里孫存さん、TBSテレビ報道局の佐古忠彦さん、



司会は放送作家の石井彰さんが担当した。(上写真)

■沖縄戦—私はこのように伝えた

現在、沖縄を拠点にフリーで活躍する土江さんが2005年に制作した『ちむぐりさ～戦後60年 戦争の記憶』は、沖縄戦を体験した島民や米兵に残っていた「戦争トラウマ」を検証した。土江さんは、「ちむぐりさ」とは、沖縄の言葉で魂の疼き、忘れるようとしても忘れられない心の中に溜まる苦しさを言います。戦争が終わってもその人が死ぬまで続く心の苦しみという記憶の苦しみ、記憶の疼きを映像にしたいと思い制作しました」と解説した。



山里さんが、沖縄テレビで2005年に制作した『むかしむかし この島で』は、沖縄戦を記録した米軍のフィルムを持って、映像に写っている人々に届ける作家の活動を通して、沖縄戦を伝えた。番組には、自身の祖父の病院が吹き飛ばされるシーンも使われている。山里さんは、「映像を通して、いろんな出会いや、自分の記憶とじいさんの映像をマッチングする瞬間が自分にも訪れたので、みんなにもその気持ちを渡したかった」と語った。放送後の反響について、「家族と井戸から出て米軍に投降する自分の姿をフィルムで見つけた婦人から、『番組のおかげで毎日楽しい。語り部として各地に呼ばれたり、同じ井戸に隠れていた人達との交流も始まった』との連絡をもらった。やって良かったなという実感はある」とエピソードを紹介した。



TBSテレビ『報道ドラマ 生きる～戦場に残した伝言』は、今も「沖縄の神様」と慕われる戦中最後の沖縄県知事・島田叡(あきら)の実話を、ドラマとドキュメンタリーで構成し

た2013年の作品。佐古さんは、この番組のドキュメンタリー一部分のチーフディレクターを担当した。「一人の人物を通して、俯瞰して沖縄戦全体を私達自身も考え、伝えることができた」と述べた。

■戦争を伝える難しさ



石井さんからの「戦争体験者、証言者が少なくなって、証言を重ねていく取材は難しくなったのではないか」との質問に、土江さんは「取材では、これは聞いていいのだろうかと思うが、『あなたの経験は個人の経験ではない。歴史という大切なものです。あなたが黙っていると無かったことになってしまおう』とお願いしてきた。でも取材の帰り道は気持ちが晴れることはない。一緒に背負う、その人の疑似体験が自分の中に堆積する何かを感じることがあります」と心情を語った。

山里さんは「ドキュメンタリーは、人の人生に土足で入っていくようで気が重い。お互いに辛い思いを経てではないと、本当のところはたどりつけない。信頼関係です」と述べた。

佐古さんは「今の国を包むある種の空気へのあせりが背中を押していることもあると思うが、戦後70年経って初めて語り出した人がいらっしやる。だからこそ、その人にしか語れない重さがある。どう引き出すか、どう提示するかは、送

り手側に問われているのではないかと強調した。

■これからの番組制作に向けて

佐古さんは今後の番組制作について、「沖縄の戦後はどういうものだったかを取材し、沖縄戦から現代まで続く話を掘り起こす作業を続けていきたい」と抱負を述べた。

山里さんは、「証言できる方が少なくなるが、僕らがそれを受け取って、次に渡していくのか。テレビはそれができるメディアなので信じてやっていきたい」、土江さんは、「アメリカにある沖縄戦の映像や文書を丹念に見ていく。この中から何か見えてくるもの、生の顔、生の声、その人の思いがあるものを伝えたい」と今後の番組制作に向けた抱負を語った。

石井さんから「戦争体験をリアルに語る人が少なくなると、記憶が映像や文集の記録になってしまう。みずみずしい、いきいきとした記録にするためにテレビの力は大きい。僕らは慎重に、丁寧に取材をしていかなければいけない」と結んだ。

公開セミナーには放送関係者や学生、市民など130人の参加者で満席となった。参加者からは「今思えばもっと周りの戦争体験者に戦争の実像を聞いておけばよかった。今回の番組やセミナーで、戦争の実感のようなものを得た」、「戦後70年経っても沖縄の戦争は終わっていないと思った。沖縄が終戦を迎えられるようにすることは、政府ではなく、日本国民の責任のような気がする」などの声が寄せられた。

■戦後70年企画第2弾は、戦争全般と広島・長崎の被爆をテーマに開催

戦後70年企画第2弾は、『テレビが伝える 戦争の記憶と記録』と題し、番組上映会は8月11、12、14、15日の4日間にわたり、横浜の情文ホールで実施した。延べ参加数は1,111人、一日の平均は278人で、番組1本毎に60人を超える盛況だった。期間中の上映番組は、放送ライブラリー公開番組から厳選し、1日にドキュメンタリー4本とドラマ1本づつ、4日間で合計20本を上映した。今回の番組上映会は、「制作者・脚本家とその作品」との副題を付け、戦争関連をテーマに秀作・力作を制作してきた放送局や制作者の名前を表記した。

ドキュメンタリーでは、「北日本放送・金沢敏子と『NNNドキュメント'96 赤紙配達人 ある兵事係の証言』」、「牛山純一と『あの涙を忘れない 日本が朝鮮を支配した36年間』」、「広島テレビと『ドラマ 碑』」、「NHK長崎と『長崎の鐘は鳴り続ける 平和を叫びつづけた男 永井隆』」、「山口放送・磯野恭子と『いま松花江に生きる 中国残留婦人』」、「日本海テレビ・古川重樹と『クラウドピアからの手紙』」、「大島渚と『ノンフィクション劇場 忘れられた皇軍』」、「RKB毎日・木村栄文と『ドキュメンタ

リー 絵描きと戦争』」、「NHK・工藤敏樹と『和賀郡和賀町～1967年・夏』」など16本。ドラマでは、「脚本家・山田太一と『終りに見た街』」、「橋本忍・岡本愛彦と『私は貝になりたい』」や倉本聰・市川森一作品など4本。

■NHKと民放のドキュメンタリストが登壇



公開セミナーは、8月13日、上映会と同じ会場で、午前中は登壇者関連番組の全編上映、午後は討論を行った。登壇者は、元NHK・現在は立正大学教授の桜井均さん、元熊本放送・現在は長崎県立大学教授の村上雅通さん、東海テレビ・報道局専門局長の阿武野勝彦さん、放送作家の石井彰さんが司会を務めた。(上写真)

■戦争をテーマに伝えてきたこと

桜井さんはNHKで多くの戦争関連番組を制作し『テレビは戦争をどう描いてきたか』の著書もある。1991年制作の『NHKスペシャル アジアと太平洋戦争(4) チョウムンサン(4)の遺書 シンガポールBC級戦犯裁判』は、戦争中に朝鮮半島から軍属として集められ、泰緬鉄道建設の通訳だった青年が戦犯で処刑される。彼の残した遺書を手がかりにBC級裁判で裁かれたものを追った作品だ。桜井さんは、「彼の遺書の中に『自分は死んでいくが、誰かの記憶の中に残っていたい』という言葉がずっと引っかかっていて、彼の記憶を託されたように勝手に思った」と語った。



村上さんは、熊本放送で戦争やアジア、水俣病などをテーマに、多くのドキュメンタリーを制作した。『封印〜脱走者たちの終戦』は1996年の制作で、終戦の2週間後、南太平洋のブーゲンビル島で起きた、熊本第六師団の兵士30人の銃殺刑に関わった元兵士が51年間封印されてきた事実を探った。村上さんは、「前作で『墓島』と称されたブーゲンビル島の悲惨な戦いの生き残りで、戦後、僧になって亡くなった戦友を弔ってきた元兵士を取り上げた。この取材中に偶然、部隊の多くの兵士が脱走したという話が出て、証言集めに入った」と、発端を語り、そして「最初はカメラの前で証言してくれる人はいなかった。証言してもらうまで半年間で15回通った方もいた。ある時期から、この真相にたどり着きたいという使命感がメラメラと湧いてきた」と制作の舞台裏を紹介した。

阿武野さんが、戦後50年・1995年に制作した『村と戦争』は、岐阜県加茂郡東白川村では909人が戦場に送り込まれ、203人が戦死している。村の祈念館作りを通して、村と戦争との関わりを綴っている。阿武野さんは、「旅行の帰りに寄った東白川村のお土産屋さんで『平和への礎』という本に出会った。ページをめくると、その村が丸ごと戦争を内包している。ここを掘っていけば、何かが見えるかもしれない、戦後50年を迎えるタイミングで取材に入りました」と番組制作のきっかけを語った。

■軍隊は官僚組織、ムラ社会だった

戦争取材をしてきた感想を聞かれて、桜井さんは、「ネタという面からは豊富だ。しかし心地よいネタではない。やればやるほど抜けられなくなる。戦争の場合は、責任の問題とか、事実の認識も、謝罪も補償もあいまいだ。あいまいだらけのままだが、ものすごく巻き込まれていると思う」と強調した。村上さんは、「一つは責任の所在が分からないこと。『封印』の場合も責任者にある程度近づいたが、その方が亡くなったり、周辺取材しても核心が出てこ

なかった。二つ目は、証言者の口が堅かったことだ。何度も通いようやく証言してくれたのは、戦後50年の節目も影響したと思う。戦争の取材で一番大変なのは、官僚組織にどう入り込んで行くか。上官だった方から『軍隊は官僚ですよ』との発言もあった。私は水俣病の作品を作ってきたが、水俣病も軍隊も同じ構図だ。責任をとる人がいない、責任の所在がどこにあるか分からない」と指摘した。

阿武野さんは、『村と戦争』でのインタビュー中、「兵隊検査は甲乙丙で丙だと不合格です。乙種合格だったので、これで村の皆さんもお付き合いしていける」との言葉にドキッと、「ムラ社会がそのまま温存されている、今の日本社会の何かにぶつかっていく可能性がある」と直感しました」と語った。



■何を描いてこなかったのか

石井さんからの「私たちは何を描いてこなかったのか」との問いかけに、桜井さんは、「取材しておきながら出せなかったことです。一般的に難しい問題があって描けなかったのか、何が描けないかということではなく、描こうと思って失敗したことの責任は重い」と指摘した。

村上さんは、「裏付け取材がとれないと、証言が使えないことを何度も体験した。これが戦争取材でこれからも立ちだかる壁ではないかと思う」と説明し、「今できることは、私がやってきたことを、後輩や学生たちに伝えるということ」と抱負を述べた。

阿武野さんからは、「戦後50年で『村と戦争』、60年には石井さんと『いくさのかげら』を作り、今年の戦後70年は作らないだろうと思っていたら自分でやることになった。8月8日から『戦後70年 樹木希林ドキュメンタリーの旅』を6本シリーズで放送している。樹木さんが広島、沖縄、靖国神社などを旅してゲストと対談し、その真ん中に過去のドキュメンタリーを挟む。普遍性のあるドキュメンタリーの魅力を広げたいと考えた、一つの方法です」と紹介した。



石井さんは最後に、「桜井さんの番組からBC級の朝鮮人軍属の話、村上さんの番組から終戦2週間後に処刑された日本人兵士たちがいたこと、阿武野さんの番組から、岐阜の山奥の村と戦争の捉え方など、たくさんものを得ました。3人が番組を作ってくれたことに改めて感謝したい」と結んだ。

公開セミナーの参加数は163人で、アンケートには、「今回のような“戦争体験者の声を伝える場”であってほしい。貴重な映像と声には重みがあり、多くの学びがあった」、「関係者が重い口を開くまでの制作者の努力に感謝したい」などの感想が寄せられた。

■戦後70年 合同番組上映会を広島で開催

戦後70年の節目となる今年、広島の実全テレビ局が合同で「NHK・民放番組上映会2015 ～テレビが記録したヒロシマ～」を開催した。8月8日～17日にNHK広島放送局の



ハイビジョン・シアターで行われた上映会には、10日間に815人の来場者があった。

各局がこれまでに制作した被爆、平和関連のドキュメンタリーやドラマなど25

番組を選び、毎日5本ずつ上映した。番組は、横浜の放送ライブラリーからIP伝送によりストリーミング送信したコンテンツを会場の大型スクリーンで上映した。

参加者からは、節目の年に広島の実全テレビ局が実施する取り組みを評価する声が多く寄せられたほか、今後の継続開催や県外での実施を望む声もあった。

■広島平和記念資料館にサテライトを設置

被爆70年となる今年、9月1日から広島平和記念資料館に放送ライブラリーの公開番組が個別視聴できる「サテライト・ライブラリー」が設置された。

同資料館情報資料室(地下1階)でテレビ番組がパソコ

ンで視聴できるようにした。視聴可能な番組は同館が選んだもので、1966年～2005年にNHKや各地の民放局が放送した原爆関連番組8作品である。



■諫早図書館で番組視聴を再開

昨年度に続き、諫早市立諫早図書館(長崎県)で「サテライト・ライブラリー」の運用を開始した。

8月21日から同館の「ふるさとの文人コーナー」で同市出身の脚本家・市川森一氏が手がけたテレビドラマ16本を視聴できるようにした。

昨年度運用したときの反響が大きく、来館者から継続の希望が寄せられた、地元・諫早市を舞台にしたドラマ「親戚たち」(フジテレビ・1985年・全13回)のほか、新たに「私が愛したウルトラセブン」(NHK・1993年・全2回)と「長崎-上海物語 月の光」(テレビ長崎・2008年)を視聴番組に加えた。



企画展「手塚・石ノ森ヒーローズ」&夏休み子供向け体験教室を開催ほか

■企画展「手塚・石ノ森ヒーローズ」

7月10日～9月13日、企画展「TEZUKA ISHINO MORI HEROES 手塚・石ノ森ヒーローズ」を開催。手塚治虫と石ノ森章太郎の出会いと交流・映像への原点の紹介を始め、テレビで放送された二人の作品を中心に、マンガ直筆原稿・絵コン



テ・セル画・台本など、貴重な資料を多数展示した。

また、戦後70年の本年、戦争を体験した両氏の想いが込められた作品の展示を通じて、平和へのメッセージを伝えた。併せて、放送ライブラリーで公開中の番組を中心に両氏の原作のアニメ

や特撮番組などを多数上映した。会場では、手塚・石ノ森世代の40～50代を中心に、幅広い層の来館者が直筆原稿の展示などを、時間をかけ、丁寧にみる姿が印象的だった。期間中、2万近くの来館者が訪れた。



■夏休み 子供向け体験教室を開催

放送各社の協力および諸団体の助成を受け、今年も小中学生向けの各種体験教室を下記のとおり実施した。

◇日テレ体験教室 7月25日 参加者151人

講師:日本テレビ

小4～6年生と保護者/子どもゆめ基金助成事業

◇ラジオ・DJ体験教室 8月4日 参加者28人

講師:FMヨコハマ

小4～6年生と中学生/
放送文化基金助成事業

◇アナウンサー体験教室

8月7日、12日 参加者69人

講師:フジテレビ

NHK日本語センター

小4～6年生と中学生/放送文化基金助成事業



■全国展開推進部会を設置

公共施設でのサテライト・ライブラリーの設置ならびに大学での教育利用について、更なる拡充策を有識者の提言をもとに進めるため、事業運営委員会の下部機関として全国展開推進部会(部会長:音好宏・上智大学教授、他委員5名)を設置した。

第1回部会を9月18日に、第2回部会を10月16日に開催した。今後、27年度内に2回開催し、答申を出す予定。